

地・学相互貢献による「奈良県立大学型地域志向教育」確立 のための調査・研究

奈良県立大学地域創造学部
教授 小松原 尚

1. 成果報告の概要

大学教育の場で想定されている「地域貢献」とは、学生のための教育活動に資するためのものである。地域志向教育のために用意された学外における体験の場もこの観点から、量的な側面のみならず、質的にも充実を図らなければならない。本研究にあってはそのための地域（自治体）と大学相互の協力関係に着目しながら、学生の教育の場と教材の提供にどう結実するのかを明らかにした。

研究においては、学びの「治験者」としての位置づけから、学生を調査活動の補助員として活用した。さらに、学生募集にかかわる大学間競争激化の中、その典型地帯として東海道メガロポリス、縁辺地域から札幌都市圏を選定し、そこにおける大学と自治体の学生に対する教育を通じた「相互貢献」に関して考察し、その活動の先駆的側面を明らかにした。本学にあっては、フィールドワーク科目とコモンズゼミとが地域志向教育の枢要部であるので、教育活動においては本研究の成果も迅速に活用を進めた。

奈良県立大学にあって地（知）の拠点事業の実施をみて、3年目になった。この事業は、大学教育改革を一層加速せることにその眼目がある。しかしその一方で、改革を急ぐ余り、その主題について、大学を構成する教職員同士や、自治体など地域の関係者との間で、この事業に関する理解に隔たりを感じることもある。例えば、自治体からイベントにかかわるスタッフとして募集を受けることがあるが、その要請は突発的であり、計画性に乏しいこともある。教育計画に基づいた活動を大学は行っているのであるから、われわれの取組の主旨を理解しての自治体からの要請とは考えにくい。

この背景には、大学、特に上に立つ人々、直接団体との交渉にかかわっている担当者の中の一部にも、その対応に課題のあることを示している。彼らには「地域貢献」を大学から自治体への一方的な便役提供ではなく、教育活動の一環であることを自らも理解し、相手方からも共感を得る努力と工夫が求められているのである。

地域志向教育とは日常の講義、すなわち座学で学んだことを大学の外で学生自らが実際に確認する教育である。同時に、学生が訪れた地域において、その活動がそこで生活する人々にとっても暮らしつづけるための刺激となるものである。そして、学生自身も自らの活動が社会化されることに気付く学習活動の一環でもある。そこで、本研究では、上記の問題意識から、地域（自治体）と大学との学生に対する教育環境の共有化、すなわち「地・学相互貢献」の観点から事例調査を試みることを第一の目的とした。

次に、奈良県立大学型地域志向教育の内容を整理することを第二の目的とした。本学における地域志向教育の特長は、必修科目であるフィールドワーク科目とコモンズゼミにあることは言う

までもない。この教育手法は地域創造学部開設から現在に至るわれわれの教育実践の延長線上にある。個人の取組に関しては大まかな整理を終えたが、個別の取組が大学全体との相互連関を明らかにすることである。そして、最後に標記テーマにかかわる、学生に対する教育を充実するための取組課題を明確にすることを目的とした。

上記の目的に接近するために、①学修空間環境調査、②教材素材調査、③貢献公開活動の3つの手法をとった。まず、①については、学生を調査補助として活用し、学生自らの目線により、対象地での学習活動の環境調査のみならず集合から目的地まで、その往復途上も含む調査活動である。次に②は、東海道メガロポリスにある2つの都市域、この巨帯都市圏から離れた札幌都市圏を素材に、申請者自らが調査活動を行なった。そして③は、学外講義などの機会を利用して、学生との活動で得た知見を教員が公表した。

奈良県立大学における地域志向教育の特徴は、大学教育改革と地域志向教育とを連動させ、そのための科目としてコモンズゼミとフィールドワーク科目を設定し、それらを本学における学修上の必修科目としたことである。そのために自治体や事業所、諸団体と協力協定を締結している。このことは好意的に受けとめられるべきものであるが、量の確保を急ぐ余り、その質的な側面での点検は必ずしも十分との判断を得にくい状態も見受けられた。

地域志向教育にあつては、学びの場・学校としての大学における講義とその知識を踏まえた学外における学生の実践行動とが連動することにより、学生にとっての教育的効果が得られることになる。今回の調査より、企業や団体にあつては、大学教育における学外における学習の意義を考えた対応がなされていたように考えられる。一方、自治体にあつては、本学のフィールドワーク科目におけるボランティア活動に対する理解が不十分に思われる事例もみられた。協定を理由に当該自治体への学生による無償労力提供を当然視したり、大学の学年暦を無視したかのようなボランティアの参加要請もあつたのではなかろうか。

「県民だより奈良」第356号8頁（奈良県広報広聴課、2016年2月1日）には、本学のフィールドワークの取り組みが紹介されている。学生の企画による屋台の出店の様子の説明文に、「桜井市本通では地元の協力のもと商店街のコミュニティー再生への活動が始まりました」と記されている。一体誰がこの商店街の住民なのだろうか。「地域創成」の主体は誰なのか。疑問に思う。この記事は間違いで「桜井市本通では奈良県立大学の学生の協力のもと地元の商店街のコミュニティー再生への活動が始まりました」が正しいのではないか。しかし、前者に間違いのないだろう。なぜなら、掲載誌は奈良県広報広聴課の確認を経たもので、県の考えが端的に示されたものと理解できるからである。

法人化されたとはいえ、奈良県からの規制、指導を「甘受」せざるを得ないのが奈良「県立」大学である。それは、学生のために一層の助成を得たいという願望の表現形態である。学生は授業料を払うゲストである。奈良県の県立大学の学生へのホスピタリティーの質が問われている。われわれの大学が法人化されたというのは、県民の宝としての大学への援助を一層強化し、教員が学生の教育のために資金や施設を使いやすくするための制度変更である。この点への奈良県及び法人そしてその幹部の一層の理解と改善が求められることは言うまでもない。

地域志向教育にあつては、学生による展示・表現活動の場を常置することも必要になる。学習コモンズ制は教員ひとりひとりの教育上の工夫を学生の表現活動に結実させる制度でもある。芸術系のゼミであれば、作品を繰り返し展示しなければならない。地域で暮らす人々にとっては、学内の「〇〇」に行けば、若者のはつらつとした作品を鑑賞できる。そのような交流の場の設定

こそ「地域交流棟」にふさわしいのではないか。その場所はフィールドワーク科目の学生発表のポスターセッションの場としても有効であろう。

表現活動を充実させるためには優れた作品に触れることが必要である。県立大学の近隣にある県立美術館はその意味で格好の場所である。教育目的での利用に際しては無料開放を実現すべきである。学生に対する県のホスピタリティー度が試される。そして、県立美術館での作品鑑賞のみならず、そこでの解説ボランティアの方の質の高い活動に接することは、フィールドワーク科目に学生が取り組む際にも重要な指針を提示されるであろう。地・学相互貢献による「奈良県立大学型地域志向教育」の具体化の一端を感じられるのではないかと思う。

フィールドワークには多くの費用を必要とする。その教育活動ためには安定的な基金が必要になる。本学が法人化された今こそ、その基盤確立のために寄付金の募集の主体となって取り組むべきである。寄付金とともに浄財を提供された方々の本学に対する提案も一緒に寄せられれば本学の地域志向教育の発展に大きく貢献することになる。

2. 調査活動一覧

①学修空間環境調査、②教材素材調査、③貢献公開活動については以下の通りである。①はさらに、(1)現地訪問調査、(2)講演聴取調査に分かれている。①と③の調査は学生の参加による学習との関連や講演内容に関する調査を実施した。

第1表 現地訪問調査

番号	活動日	調査対象	所在地	活動区分
1	2015/05/07	①キューピーマヨネーズ伊丹工場	伊丹市	コモンズゼミ
		②公益財団法人尼崎地域産業活性化機構	尼崎市	
2	2015/05/24	経済地理学会大会	尼崎市	専門ゼミ
3	2015/06/12	奈良県立大学から黒髪橋まで	奈良市	専門ゼミ
4	2015/06/20	①インテックス大阪	大阪市住之江区	専門ゼミ
		②野鳥園臨港緑地(大阪南港野鳥園)		
5	2015/06/25	やまと錦魚園郡山金魚資料館	大和郡山市	コモンズゼミ
6	2015/07/20	奈良県立美術館にて開催の「田中一光/美の軌跡」特別展	奈良市	専門ゼミ
7	2015/11/09	①伊丹スカイパーク、大阪国際空港	伊丹市、豊中市	専門ゼミ
		②アサヒビール吹田工場	吹田市	
8	2015/11/23	奈良県立美術館にて開催の「一錦絵誕生250年ー浮世絵版画/美の大世界」企画展	奈良市	専門ゼミ
9	2016/01/15	①トヨタ産業技術記念館	名古屋市西区	専門ゼミ
		②リニア・鉄道館	名古屋市港区	コモンズゼミ

※学生独自の調査活動は含まず。

第2表 講演聴取調査

番号	活動日	聴取対象者	聴取場所	活動区分
10	2015/12/07	株式会社 JTB 総合研究所 人材育成事業部 内田二郎さん	奈良県立大学	専門ゼミ

第3表 教材素材調査

番号	活動日	調査地	活動テーマ
11	2015/08/20	①静岡大学浜松キャンパス高柳記念未来技術資料館	大学と企業との相互貢献活動の調査
		②スズキ歴史館	企業の広報活動と大学教育への活用
12	2015/08/26	奈良県内優良中小企業	中小企業団体による大学教育への貢献活動の調査
	2015/09/04		
13	2015/09/05	京都伝統工芸館	大学と地域との相互貢献活動の調査
14	2015/09/10	①白梅学園生協	大学の学修環境の整備における学内団体（生協）の役割に関する調査
		②津田塾大学生協	
15	2015/11/03	北海道北空知地域	「北空知の地域形成と農業の現在」をテーマとする北海道地理学会エクスカーションへの参加

第4表 貢献公開活動

番号	活動日	活動催事	活動内容
16	2015/05/24	経済地理学会大会ラウンドテーブル（研究小集会）	「産業観光を楽しむ」をテーマに設定したコーディネーターとして、趣旨説明を行った。
17	2015/06/20	①夢ナビ Talk「産業観光は楽しい！」	①と②とも、本学の広報活動に一環として、高校生と父母を対象とした講演活動である。模擬授業を実施後の質問コーナーでの受験生父母からの質問にも応答した。
		②夢ナビ Live「17世紀は海の底—大阪湾沿岸域の歩き方—」	

3. 学修空間環境調査の補助活動にあたった学生からのコメントの一部

(1) 現地訪問調査

県立美術館「田中一光展」観賞学習関連観察報告

□今回の活動で得られた知見は、今までのあなたの勉学とどのように関連するか。

◆同じ産経観世能のポスターであってもそのデザインによって雰囲気は全く異なる。このようにポスター1枚であっても、人々に与える印象は変わるので、広告が持つ意味合い性の大きさを実感し、「消費者行動論」の授業と少し共通するなと感じた。

□今回の活動の体験から、どのような発見があったか。ドキドキするようなことがあったか。
◆田中一光のオリジナル書体があるとは知らなかった。個人的には「文字」のところにあった「作品・無」が気に入った。12画目を点ではなく丸で表現していたところが、おもしろいと思ったと同時に、さすが田中一光だな、凡人とは違うなと思った。

□今回の活動で得られた知識、経験を今後のあなた自身の勉学にどう活かすか。

◆今回の鑑賞を通して、田中一光はさまざまな領域・分野から刺激を受けて、デザインを完成させているのだと感じた。これは常日頃からアンテナを張っていることの現れでもある。私も彼のように常にアンテナを張っているいろいろなことを吸収し、それら手に入れた知識などを別の場面で役立てられたらと思った。

(2) 講演聴取調査 (JTB 総合研究所 内田二郎さんの講演に対して)

□今回の活動で得られた知見は、今までのあなたの勉学とどのように関連するか。

A さんのコメント

ランドオペレーターの仕事の一つに、レストランの手配がある。ランドオペレーターは、日本人観光客に満足してもらうため、旅行初日でいきなり豪華な料理を出すのではなく、徐々に料理のグレードを上げるという工夫をしている。これは心理学の「ピーク・エンドの法則」を利用していると考えられる。ピーク・エンドの法則とは、快か不快かの評価は、物事のピーク時と終了時の感情で決まるという法則である。つまり、全体的に見れば楽しい旅行でも、最後に嫌な思いをすれば旅行者の評価は下がってしまうのである。

心理学の他、レストランの手配は「中小企業論」とも関連する。レストランや料理を決める際、オペレーターは実際に料理を食べ、自分で納得したものを旅行者に提供する。顧客満足度を高めるには、それだけの努力が必要になる。この点が「中小企業論」で学んだ事と関連している。競争の中で生き残れる企業は、顧客の身になって丁寧な対応をし、信頼を得ている企業なのである。

B さんのコメント

今まで学んできた地理的知識は、観光関係の仕事をする人の中でもあまり知られていない知識ということで、もし観光関係の仕事をしたければ奈良県立大学で学んだ知識を得ていることは他の人との差別化に繋がると感じた。

C さんのコメント

これからは「外国語は話せて当たり前。その外国語というツールを使ってあなたはどのようなことができるの?」ということを企業は求めてくるという話に、今まで何となく感じてはいたが、実際に働いている人から聞いたことで現実味を帯びて外国語の重要性を感じた。そして TOEIC 〇点だからいいというものではなく、仕事をする上では外国語などはあくまで手段の一つでしかないということもわかった。

大学において外国語は、一部の学部を除いて、1年生の頃に履修して単位を取得すれば、その後は全く使わないという場合も多いかとは思いますが、単位を取得したから終わりではなく、いつでも使えるように語学力の維持に努める必要があるのだと感じた。

D さんのコメント

スペインやイギリスでは、日本の旅行者のツアーということを重視してランドオペレーターとして仕事をしており、旅行者に海外の事情を押し付けるより、海外に日本の事情を伝えることで良いツアーにするという話が印象に残った。また旅行者はスペイン・イギリスのイメージを持っており、それを体験するために訪れる。しかしながらそのイメージとは離れたところにある実際

を、どのように旅行客に伝えるか考えなければならず、そのためには日本の事情とその海外の事情の両方を詳しく分かった上で提案を考える必要がある。海外で働くことは二つの国のことを考えなければならない、まさにおっしゃっていた日本と海外の架け橋であると感じた。

(3) 貢献公開活動(大学広報活動・夢ナビでの小松原のTEDトークに対して)

◆講義内容が地域創造学部のような様々な講義内容とどう関連性があるか。

Aさんのコメント

産業観光は地域経済や観光創造に関わることなので、地域創造学部での講義内容と関連性がある。

Bさんのコメント

地域創造や観光を考えるにあたって、産業という新たな視点からもさらに楽しく考えられるのだということをアピールする内容であり、それはわが大学において小松原先生の講義以外でも先生方が言っているように、産業だけでなく他にも多くの新たな視点がありうるのだということを示唆していた。

Cさんのコメント

観光はもちろん、企業の立地や地域住民の雇用の創出、観光客と地域との関わりなど様々なことと関連がある。

Dさんのコメント

工業都市がどのように発展したのか、またなぜそのような土地利用をされて現在の景観になったのかなど、地域が発展するにあたって今までの事例や共通点を探することは重要である。